「カナダ音痴」のこと

平野敬一

英米やその他の国については、いろいろと雑多な知識をもっているが、カナダのことになると、ほとんど空白、無知も同然の状態を、仮りに「カナダ音痴」と名づけておこう。日本では、学生にも、学者にも、報道機関にも、出版社にも、この「カナダ音痴」の症状がみられる。それも、かなり重症のケースが多い。

私は、毎年、学年始めに受持ちの学生の「カナダ音痴」に業を煮やすのが常である。ある女子大で担当しているカナダ文学の最初の時間に、カナダについての簡単な常識テストみたいなものを試みることにしているが、その結果に、私はいつも天を仰いで嘆息したくなるのである。とにかく学生たちは、なにも知らない。カナダの首相の名を知っている学生などは微々たるもので、中には首都オタワの名すら知らないのもいる。カナダかカナダ文学になんらかの関心をもっている者だけが私の授業を選択するはずなのだが、それでもこの始末。

日本人は世界に比をみないほど知的好奇心が強い。日本は、世界のあらゆる情報がふんだんに流れ込む「情報世界」である——というふうに私たちは聞かされることが多い。ところが、この情報の豊かさは、かなり偏った、空白や欠落だらけの、みかけ倒しの豊かさではないか。私は学生たちの「カナダ音痴」に接する度ごとに、そう思わざるをえないのである。学生自身の不勉強や知的好奇心の欠如に「カナダ音痴」の原因の一斑はあるに違いないが、問題は、彼らを日常とりまく情報の総体の中に、カナダについてのものが、ほとんど存在しない、という点にあるのではないか。そんな気がする。

たとえばアメリカのレーガン大統領やイギリスのサッチャー首相に比べると、カナダのトルドー首相は、日本の新聞紙面にほとんど登場しないといっても過言でない。ニュースには、もちろん価値の軽重があり、カナダのことは、すべて英米と同等のウェイトで報道さるべきであるといくらカナダびいきの私でも思わないが、偏りが少々ひどすぎるのではないかと思う。日本人がカナダのことになると、他とのバランスを失するほど、一般に無知であるのは、多分に情報提供者側(たとえば新聞社)の責任だと私は思う。(日本経済新聞社を唯一の例外として、日本の新聞社はカナダの報道は駐米特派員の片手間仕事で間に合うと思っているふしがある。)

話は変るようだが、日本では、世の中の英語教育熱を反映してか、英和辞典の出版が相変わらず盛んであり、そのレベルも高い。昨秋から今春にかけてK社の大辞典の新訂版が出たかと思うと、それと相前後してS社やI社の中辞典が新刊された。それぞれ工夫をこらした苦心作であることは認めるが、ことカナダに関するかぎり、辞書が与える情報のお粗末さ加減は、新聞など報道機関のそれに劣らない。いや、それよりもっとひどいかもしれない。

紙数の都合でI社の中辞典だけを例にとってみる。この辞典の一つの特色は、人名地名などの個有名詞の採録の豊富さである。実際、あたってみると、よくこの小さな版型に納まったと思われるほど、採録が多い。レーガン大統領はいうに及ばず、マリリン・モンロー、ミッキー・マントル、ムハメッド・アリなどスポーツや芸能関係の有名人、英米はもちろん英米以外の作家、たとえばシムノン、サガン、モンテルラン、さらに作中人物のルパンまでが入っており、中国人では、古い世代にとってはなつかしい名である宗美齢(蔣介石夫人)を含めた宗の三きょうだいが三名とも入っているといったにぎやかさである。これだけ多彩な顔触れだから、さぞカナダ人も、と思って調べてみると、驚くなかれ、完全にゼロなのである。トルドーはもちろん、マクドナルドも、ベスューンも、作家では日本に読者の多いモンゴメリ夫人もモーワットも、とにかくいっさい登場しないのである。マクレナンやカラハンの名もみえない。私がようやく発見した一人は、もとカナダ人(?)のガルブレイスだけだった。この高名な経済学者も、カナダ人にとどまっていたら、おそらく採録から外されたであろう。ビクトリアなどカナダの地名の脱落ぶりも相当なものだが、ここに挙げるいとまがない。

この辞典の広告をみると「個有名詞を幅広く採録した」とうたってあるが、この「幅広く」の中にカナダが含まれない点が、私にいわせると、きわめて日本的な「カナダ音痴」の症状なのである。出版社の方で、なにも意図的にカナダを除外したわけではないだろうが(と私は好意的に解釈するが)、英米の他にヨーロッパや中国までを「幅広く」包含するその視野の中にカナダを含めることをまったく思いつかない点が、日本の出版社、報道機関、さらに学界の、古くからの伝統なのである。

私は、ここ何年来、学生たちの「カナダ音痴」ぶりに業を煮やしてきたが、肝心の情報提供者側の方が、症状が古く、かつ重いように思われる。彼らは、ことカナダに関する限り、欠陥情報しか提供してこなかった、といってもいいすぎになるまい。してみると、そういう欠陥情報の被害者にすぎないわが愛する学生たちに、鬱憤の矛先を向けていたのは、少々お門違いだったかもしれない。そんなことに、ようやく気がつくようになった。

(東京大学教授)